

原・水爆の実験場になった南太平洋のビキニ環礁やムルロア環礁付近の島民は強制移住させられ、半世紀たった現在でも帰島は許されていない。しかも移住させられた島でも被曝しており放射性のヨウ素などによる子供の甲状腺癌、大人は甲状腺機能低下の症状が多く見られるという。

甲状腺の被曝量は、子供で3～5.2グレイ、成人で1.6～12グレイと見積もられているが、発病率は他の正常な地区に比べると100倍以上。残念ながら積極的な調査や医療行為は行われておらず、医療機関も少なく、なかば放置されたままといえる。

チリノブイリ原発事故では全欧州に放射能の降灰があり、地元ウクライナでは住民は各地に避難したままで、25年経った現在でも故郷へ帰れる目途は全くなしです。

最大の被害を被った隣国ベラルーシでは甲状腺異常の症状の多発、各種癌、白血病その他による後遺症に苦しむ人達がいることは前項で述べました。



同じロシアでは古くなった原子力潜水艦を多数放置、電気代が払えないから冷却しないで原子炉を止めてしまった。当然メルトダウンしていると思うが、沈黙したままでナニも判らないが、汚染していることは確かだし、内部被曝の乗組員もいるはず。あるいは原子炉をそのままにして日本海や北海に沈めてしまった。強国の暴挙、国際法無視、近隣諸国も強国の前では抗議もなし沈黙のままです。

原水爆ではない砲弾による放射能汚染があった。それは湾岸戦争で使用された劣化ウラン弾によるもので思いもよらぬ内部被曝が発生した。



劣化ウランとは、ウラン鉱から採掘された天然ウランを濃縮し核兵器や原子力発電の燃料として使えるようにウラン 235 (U235) を精製するが、低レベル放射性廃棄物となるウラン (U238) に分離される。

高レベルの放射性元素 U235 は1%程度、残り99%は劣化ウランとして廃棄される。この劣化ウランは鉄の2.5倍、鉛の1.7倍の比重があり、鉛の2倍に密度がある。米軍はこの特性を生かして対戦車攻撃の砲弾として利用することを思いつき、この砲弾は重くて、硬いので戦車の装甲を貫通し、車内の装置を破壊する、また貫通する際に猛烈な熱を発生し、車内の兵士は焼死してしまう。また廃棄物の再利用だから製造が廉価なので、各国陸軍は対戦車用砲弾として採用している。この砲弾が数多く使われたのが湾岸戦争時で砂漠での戦車戦だったので、米軍が一方向的にイラク軍を撃破した闘いでした。

